

三階教に關する隋唐の古碑 (下)

神田喜一郎

此の一篇は予が本誌前號に掲げた拙稿の續編であるが、予は最近俄に支那漫遊の途に上ることとなり、已に發軔の日も數日の後に迫つてゐる爲めに、忽卒多忙の中を強ひて筆を執り兎も角も未完の前稿を完結せしめたものに過ぎない。従つて予自らさへ不十分に思ふ點の多いのはいふまでもなく、今は何事も己むを得ないのを遺憾とする。その上前稿の印刷成つて後に隨分その誤謬のあることを發見したから、本稿には是非ともそれを訂正したいと豫期してゐたのであるが、それも遂に出来なくなつて終つた。いづれ明年支那から歸つて後に、或は再び稿を改めて大方の是正を仰ぐこともあらうが、重々の失態は切に讀者讀彦の寛恕を祈る次第である。然しながら一體予は固より佛教々理の學に於ても將た佛教史學に於ても何等嘗て研鑽したこともなく全くの門外漢である。従つて予の此の稿を草したのも單に支那佛教史料として興味のあるかゝる古碑のあるといふ事實を紹介して聊か世の佛教史家に資する所あらんことを期したばかりであつて、それに関する深い研究を試みるに在つたのではなかつた。否寧ろ深い研究などは予には到底出来得るものでもないのである。されば予自らの記述の如きは敢て取るに足らぬ。要は何か佛教を専門に研究せられる人々によつて、予の紹介した古碑が適當に利用せられるならば、それで予としては此の稿を草した初志が酬ひられるわけなのである。今この未熟の本稿を強ひて續けたのも全く意に存する爲めに外ならない。幸に讀者之を曲諒せられよ。

四

扱て次には澤王府主籙梁寺並夫人唐氏墓誌銘であるが、予が前稿に之を以て三階教徒にして信行禪師の墓側に陪葬せられた者の墓誌銘の如くに言つておいたのは稍當を得てゐないのであつて、實は銘文には終南山樛梓谷口の隋信行禪師の林側に葬るとある以外に何等梁寺なる者と信行禪師又は三階教との關係は見えてゐないのである。従つて果して梁寺が三階教徒であつたか否かは一切不明である。此の銘文の全文は黃本驥の古誌石華や孫星衍の續古文苑や將た趙紹祖の金石文鈔などに載録せられてゐる。然し今は此の墓誌名と三階教との間に直接の確然たる關係を見出さないのであるから、茲に其の全文を引用することを割愛しておかう。因に此の墓誌銘の原石は既に佚亡して今は存在せぬやうである。

それから次に淨域寺法藏禪師塔銘である。此の塔銘は金石萃編卷七十一にも著録せられ、相當世に知られてゐると思ふから、茲に其の全文を引用することを亦割愛しておかう。然し此の淨域寺法藏禪師なる者は、予の寡聞なる一向其の傳記の他に見えてゐることを知らぬが、塔銘によると中々の高僧であつたことは疑ない。而して其の三階教の熱心なる信奉者であつたことも塔銘によつて窺はれる。即ち今僅に塔銘の末段のみを引用して、せめて其の事實を髣髴さしておくこととする。

粵以開元二年十二月十九日捨生于寺報齡七十有八門人若喪者妣乃相謂曰和上云亡吾徒安放乃救血相視仰天椎心即以其年十二月二十口日施身于終南山樛梓谷屍隄林由是積以香薪然諸花疊收其舍利建

塚踏波于禪師塔右自般入涅槃于今千五百年矣聖人不见正法陵夷即有善華月法師樂見離車菩薩慈慈絕
紐並演三階其教未行咸遭弑戮有隨信行禪師與在世造舟爲梁大開普敬認惡之宗將藥破病之說撰成數十
卷名曰三階集錄禪師靡不探蹟隱鈎深致遠守而勿失作禮奉行云々

猶ほ前稿に三階教徒にして信行の墓側に陪葬せられ者の墓誌銘として擧げておいたものゝ外に唐
太常協律郎裴公妻賀蘭氏墓誌銘といふのがある。全文は金石萃編卷七十一に今の淨域寺法藏禪師塔
銘に次いで見えてゐるから一閱せられたい。前の澤王府主簿梁寺並夫人唐誌墓誌銘などと同じく單
に信行禪師の墓側に葬るとあるばかりであるから、勿論これが三階教徒であつたか否かは不明であ
るが、兎も角其の銘文中に信行禪師の名の見えてゐることに注意を惹く。恐らくは澤王府主簿梁寺
並びに其の妻唐氏といひ、此の裴公の妻賀蘭氏といひ、いづれも共に三階教の教徒であつたのでは
なからうかと想像する。

五

最後に予が特に紹介したいと思ふのは信行禪師與教碑である。此の碑は古今の著録に全く見えて
居らないのであつて、唯だ清朝の金石學者何紹基が殘存の一舊拓本を藏してゐた所から近年になつ
て漸やく世人に知られるに至つたものである。然しながら其の書が唐代に於て歐虞褚薛とて歐陽詢

虞世南褚遂良など、併稱せられた薛稷の手になるので、支那の金石學者は非常に之を珍重し何紹基
の如き自ら寶薛軒とさへ號して誇つてゐた程なのである。此の何紹基の藏してゐた舊拓本は猶ほ現
今でも支那の某氏に傳はり、數年以前上海の有正書局から薛少保信行禪師g. 1853と題して之を玻璃版に
付して發兌した。今その玻璃版によつてみても實際書法の立派なことは驚演の至である。然るに惜
しいことには全文が完存してゐないのみならず、現存の拓本に殘存してゐる文字の間にも裝演の際
に誤つて翦裁したかと疑はれる部分があつて、殆ど句讀の出來ない個所が尠くない。これらは如何
にして訂正すべきであるが、一體此の碑文の撰者は越王貞唐の太宗のとあるが、越王貞唐の太宗のの文は全唐文
を見ても一首も載録せられてゐないから、恐らく此の碑文も他には全く見えてゐないものらしく、
従つて今日にあつて之が句讀を正すことは随分困難と思はれる。何紹基がその所藏の舊拓本をin 1853
く世に誇つた後、魏錫曾ウイシキウの如きは尤も此の碑に注意した一人で、その續語堂碑錄in 1853には之が全文を載
録したが、矢張り原本のまゝで句讀を正さなかつた。予は意ふに開元釋教錄に引用してゐる三階與
教碑なるものは恐らく此の越王貞撰薛稷書の信行禪師與教碑を指すのであらうが、何等か佛書の方
面から之が句讀を正し得るやうな材料が見當らないものであらうか。然しながら兎も角何紹基舊藏
の拓本は不完の殘本とはいへ、その文字は一千九百餘字を存してゐるのであるから、三階教の教理
や歴史を研究せんとする者の注意によつては其の片言隻句の間から或は意外の發見を爲し得ないに

class. together
prop. name
録

T. 679a
noisy

648
pp. 23

も限るまい。故に以下全文を掲げて讀者の參考に供しておく。

隨大善知識信行禪師興教之碑並序

上柱國越王貞纂

前中書舍人薛稷書

原夫真身設範垂二字以標靈應佛涅槃顯六時以爲固岷山利見善摧之業斯遠連河緝化隨機之道載宜莫不感運以揚難考時以敷教故知行藏之理斯異廢興之業亦殊要者連肩雖復堅住之上人解慧之開士廣演八藏九部之說劇談二空三性之文曷嘗辯於真偽之宗詎能曉於是非之旨說誑法侶猶苦迷方濟濟覺徒安知最勝遂使魚目研綜珠篋之奇區別金書之祕標象運之時用揚末法之幽鍵獨步一人功伴十力惟我大善知識信行禪師矣至乎氏胄之華熏習之業既昭著於前碣於此可略而言焉仰惟禪師識洞初幾照逾機之料對藥之理定邪正於波擾決疑似於雷同妙達幾先利生同極業契初依之躅仁逾後際之用酌金河之茂典解沙界之深纏起十受於心靈遵三捨於身命惑障攸滅控洌淨之遙源慧炬弗賞既免簡擇之尤善人不濫良無枉罰之酷長鑄七損永謐三災開示之益允弘對遣之慈彌廣用因收果即從因以表真江果攝因乃緣果而除妄口高慢之見樹增上之地自空靜名相之驚飄昇河岸於振峭山彼逝魂收名鬼錄起茲朽骸受氣人靈諒釋門之指南允繙服之共北者矣雖復孤擅決了之士無窺智慧之賢猶昧開道之規尙乖勸誘之義遂使鍛冶之子未習數息之內潛濯豈不然歟欽惟曩俊親承聖範猶致疎謬靡叶深機矧乎今士纔傳遺說有迷幽趣實喪

菁華蠶蠶四生常淪苦海茫茫萬彙恒溺愛河殊塗同歸有之悉矣斯乃前哲決之於既往惟我禪師得之於韻於旋宮固守刻舛弁神鋒於水府亦猶析薪求火豈觀炎光之盛畫瓶緘毒莫飮甘露之津蚊隊之識罕周周牛便之劣滋甚握斯墜業不悟大力恃此藕絲矜乎小智者矣若乃三階演法五位騰惡而成性徇迷惡而爲習信惡之誠且篤忘善之志亦深紊善惡而因分雜正邪而靡悟於是甄明種性之貫式彰顛倒之違雖則稟命愚痴克邁辟支之軫挺質莫智俄口口御之乘若夫七處聚義能力未藉於假人等大地之廣持類元天之避獲導師諧願代苦之德靡涯正法甚深善誘之仁多裕四諦無作更明自力之知六住表規益垂得度之紀信惡迷善之子唯口口善之方信善忘惡術由祛惑而獲範克紹聲聞之聖能撥亂而致資因生臣厥躬之樂廣敷無漏之隆肇近諸身之事遠該成彼之業觀色觀象四部之教不同學上學下三寶之幾斯異佛法法之攸聞自驗自知之照理諒如矇瞽之昧即從忍受之安脩上法而攝挹習善之業彌優仰信之益日滋隨悅之方月進深荷八式蹈三義之宗好惡俱聞憂喜不溺於心術信直成緣成就克勦於情田受剗劇而猶甘希韞涅槃之趣惠首目而因悞冀證菩提之緣懼誠故之難銷褫翼衣而歸俗襲重想之存慎珍而契冷之節既調陽喜云續語堂碑錄に云く陽下及下原册版二頁計一字。之及毀正侶繼踵實於無間普聖之徒接赴於冥晦祈法雨而滌營入淨土而投誠求智之美以隆敷法之深以興樂嬉遊於火宅未懼一門之隘恣沈於冰於苦海匪憚五欲之灾因馭牛以宜慈說窮子而啓諭守節迦葉辭請食於檀主護名釋胤拒匹儷於國王且夫穢觀已成嫌惡未受不引其賊如擠其抗惟好所用自歸惟善所願躬納猶虛天而比廣若厚地而絜大煩惱之藏莫窺空智之幾難觀亦有式壞而見存或有見全而式毀

能發誠而讖咎遂刻意而悔衛二伐之報可求三乘之果何遠夢羅刹而能警臨將沒而敦念故婆門誹謗思良津而免尤闡提善根資後因而延福觀相之心既切懸念之志必深獨五逆於幽狹解四禁於冥藉原乎蒼生處俗受格異規黔黎居代殖操殊軌負才之子寔多矜己之長好譏之流則惟觀物之短既惜身之長少便觀人之短多學上益以彌豐存下好而良鮮違別之情無極業薄之道未弘靡疚懷而利他乃留想而禪己習氣飄而匪定稟命雜而弗醇暨乎詮聖之理可徵驗果之由斯照則有偏居信善兼包信惡自他之善寧敢專收自他之惡安能孤亮正可以舉善而辨善知惡而結惡焉假使少能廻己以同人廢人以從己亦未能頓祛三業長駈八正然可惡善之內則利俱學之優既遠之中因爾摠施其能都泯其蹤物我咸緝之務乃弘是以冰室由之遂寒石峰以之增峻三春式序青要之律克調九秋御節白藏之氣攸美遇善諧性叶勝緣而自藏逢惡爲情蘊凶德而成否固可廣存並學甄明別機粗迷二階之宗式標其趣矣次有利根邪見常緘顛到之想敏質僻懷恒菴迷謬之態雖復久承式珠之義夙奉禪鏡之明猶皆毀於波若尙尊沓於種智肆其輕請則背誕於三寶縱其妄識則委體於六魔墜泥黎而未央陷阿鼻而無盡徒勤誤學虛事錯遵七十五由斷見之非仍起九十一劫暗僞之苦未遑易前探於本根當歸於正遍又有因無始之界自有識之心罕聆法寶嘗淪俗化或恃長以縮短或見短以綜長或習上好之多或學下好之少惟別薄之偏駁混善惡之交馳植角之喻茲與被蠶之譏斯發洎乎觀佛開教聞法貽矩晒身之善遂多視被之惡攸衆但能廢人同己未克省躬就物志希極上之業情昏最下之規

六

以上予の管見の及ぶ限り三階教に關する隋唐の古碑を紹介した。隨分粗雜な紹介であるけれども若し之によつて専門學者の説を聞き得る縁ともなるならば眞に望外の幸である。一體支那佛敎史の研究は今後猶ほ開拓せらるべき餘地が極めて廣い。その材料として金石文などに意外なものが往々發見し得る。而して從來の高僧傳とか佛祖通載とか、さうした材料を補正し得ることが珍らしくはない。予は是非かゝる方面に今後支那佛敎史の研究せられる人々の注意を得たいと思ふのである。

(完)